

■ 2009年度 入試問題分析シート ■

一橋大学

前期日程

科目

倫理, 政経 — 政治・経済分野

総括	試験時間	120分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
	満点(配点)	法 160、経済 160、商 125、社会 230 点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

・Ⅱが「東アジアの国際秩序の変容」、Ⅲが「経済のグローバル化」をテーマとする問題であり、ともに国際分野に関する内容であった。近年、政治面でも経済面でもアジアの占める地位が高まっている。また、一方でグローバル化の進展も著しい。それらを背景として、学生にも国際的な視野が要請されることを意識した問題である。

・例年、基本的な原理・原則を時事的なテーマ（例：地球温暖化、郵政民営化、地方分権など）と結びつけて、論理的な文章が組み立てられるかどうかを試す問題が少なくないが、昨年度はそのような傾向が薄れ、基礎知識を問う問題が中心であった。今年度は、Ⅱは歴史的な知識、Ⅲは基本用語と資料読み取り能力を土台とするが、ともに論理的な展開力・考察力も問うている。その点では、一昨年までの出題傾向に近く、比較的平易だった昨年度よりも難化したといえよう。

〈特記事項・トピックス〉

・昨年度は「政治分野」からの出題がなかったが、今年度はⅡが「政治分野」、Ⅲが「経済分野」からの出題であり、一昨年までの出題パターンに戻っている。

・例年、総字数 400 字を 2～3 問の小問に分ける構成が一般的であったが、今年度のⅡは、昨年度のⅡと同じく 400 字の設問が 1 問という構成であった。また、Ⅲは異例の 6 問構成となっている。

・Ⅱでは、解答に用いる用語が指定されているが、これまではあまり見られない形式である。また、解答には世界史の知識が求められる。

・Ⅲの問 1～問 3 は日本語の名称を答えさせる設問で、一橋大学では珍しい形式である。また、問 4・問 5 はグラフの特徴を読み取らせる設問だが、制限字数が少なく、簡潔にまとめることが必要である。

〈合格への学習対策〉

・例年、時事問題を踏まえた設問が出題されている。それらの設問では、基礎知識の有無だけでなく、時事的な問題意識、データ・事案の分析力、文章の読解力、構成力、論述力など総合的な学力が試される。したがって、日頃から時事問題に関心を持ち、基本的な原理・原則と結び付けながら、自分の頭で考える習慣を身に付けることが大切である。

・一橋大、埼玉大、東京学芸大などの過去問（論述問題）に取り組んだり、新書レベルの本（岩波・ちくま・講談社・中公新書など）を読んで、大きな視点から論旨を 100～200 字の文章にまとめるトレーニングが有益である。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
Ⅱ	論述 400 字	東アジアの国際秩序の変容 東アジアの戦争に参加した国を示す表をもとに、東アジアの国際秩序の変容を問う。	かつては大国を中心とする「覇権的」かつ「垂直的」なものであった東アジアの国際秩序が、第二次大戦後の日本・中国・ソ連（ロシア）・韓国・東南アジア諸国の政策転換などによって、民主化・多元化されたことを歴史的な視点からまとめる。 解答に用いる用語が指定されているが、それが重要なヒントとなっている。	標準
Ⅲ	論述 問 1～問 3 : 10 字 問 4・問 5 : 75 字 問 6 : 220 字	経済のグローバル化と国際資金移動 先進国と途上国の国際資金移動に関するグラフから、その特徴とグローバル化の関係を問う。	問 1～問 3 は基本用語であり、一橋大学受験生であれば、ほぼ全員が答えられるレベル。問 4 と問 5 はグラフから資金移動の変化を説明する設問だが、ポイントをしばって簡潔に書かないと、指定字数（75 字）におさまらない。問 6 は、対外開放政策や IT の進歩などが、先進国から途上国への投資を容易にし、国際資金移動を促進したことを述べればよいであろう。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を 5 段階（難・やや難・標準・やや易・易）で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。